

令和6年度 岩手県資源管理型漁業漁業者協議会運営業務委託事業

令和6年度

岩手県沖における漁業資源の生態と資源特性

令和7年3月

岩手県資源管理協議会

岩手県漁業協同組合連合会

岩手県水産技術センター

目次

1 資源評価魚種

- 1 ヒラメ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.2
- 2 マコガレイ・・・・・・・・・・・・・・・・ p.4
- 3 ババガレイ (ナメタ)・・・・・・・・ p.6
- 4 アイナメ・・・・・・・・・・・・・・・・ p.8
- 5 マダラ・・・・・・・・・・・・・・・・ p.10
- 6 ミズダコ・・・・・・・・・・・・・・・・ p.12
- 7 ケガニ・・・・・・・・・・・・・・・・ p.14
- 8 チゴダラ (ドンコ)・・・・・・・・ p.16

2 漁獲動向把握魚種

- 9 タチウオ・・・・・・・・・・・・・・・・ p.19
- 10 トラフグ・・・・・・・・・・・・・・・・ p.20
- 11 マダコ・・・・・・・・・・・・・・・・ p.21
- 12 ツノナシオキアミ (イサダ)・・・・ p.22

13 岩手県における主要魚種の水揚動向・ p.23

本資料の水揚動向は、岩手県水産情報配信システム「いわて大漁ナビ」により集計したものです。年間水揚量の集計方法は以下のとおり。

- ・ケガニを除く全魚種：県内全魚市場における1月～12月までの合計値。
- ・ケガニ：県内全魚市場における12月～翌4月までの合計値。

なお、水揚量の過去平均比は、評価年と直近の過去5ヶ年平均との百分率で示しています。

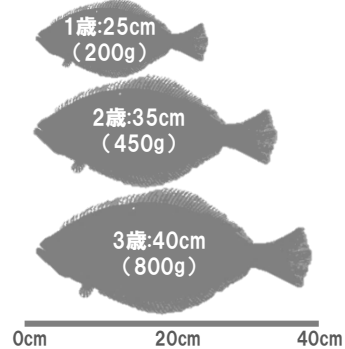
なお、推定された一部の資源量については、最新年のデータの影響を強く受けるため、前年度の評価から変更・修正される場合があります。

また、本評価結果の一部は、「水産資源調査・評価推進委託事業」及び「沿岸漁業における自主的資源管理体制高度化支援事業」により得られたデータを利用しており、引用する場合は引用元を明記した上ご活用ください。

1 資源評価魚種

1-1 ヒラメ

(呼び名：ひらめ・そげ)



1) 一般的な生態

ヒラメは、北海道中部以南の日本周辺に分布しています。魚食性で、イワシ類やイカナゴなどを主な餌としています。岩手県周辺では、水温の高い夏には水深50m以浅に生息していますが、冬場になると水深100~200m近くまで移動します。産卵期は6~7月で、約1ヶ月浮遊期間を過ごす間に眼が移動し、水深5m前後の砂浜域に着底して親と同じ生活に移ります。

成長は早く、1歳で全長25cm(200g)、2歳で全長35cm(450g)、3歳で全長40cm(800g)に達します。オスは2歳、メスは3歳で成熟し、産卵に加わるようになります。

2) 水揚動向

ヒラメは、主に定置網、底刺網により漁獲されています。岩手県では、岩手海区漁業調整委員会指示に基づき全長30cm未満のヒラメの採捕が禁止されており、漁獲対象は30~40cm台(1~3歳魚)が主体となっています。

水揚量は震災以降急増し、平成26年には過去最高の257トンに達しました。平成27年以降減少していましたが、令和2年から徐々に増加しています。令和6年の水揚量は171トン(前年比141%、過去平均比157%)で、前年より増加しました(図1-1)。

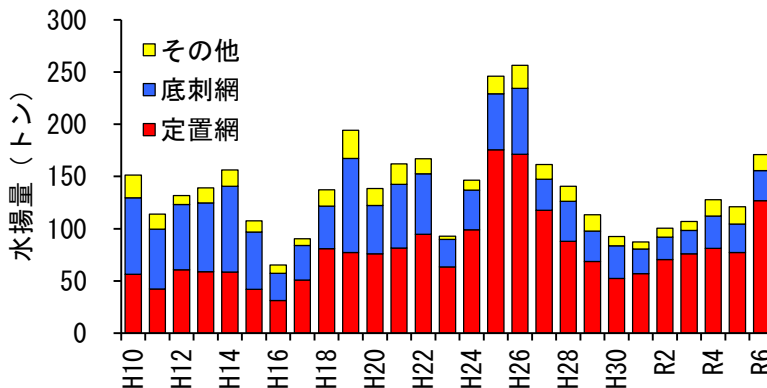


図1-1 岩手県におけるヒラメの漁法別水揚量

3) 資源動向

魚市場水揚物の全長組成（図1-2）と水揚量に基づく推定資源量（図1-3）は、平成22年頃から3歳以上の高齢魚を主体として増加し、平成25年にピークとなりました。その後減少に転じ、令和元年から再び増加傾向となりました。令和6年（漁期:令和5年7月～令和6年6月）は、前年漁期の93%と少し減少しました。

一方、今後の加入の指標となる野田湾及び大槌湾における着底稚魚分布密度は、平成24～27年にかけて両湾ともに高めに推移していましたが、平成28年以降は低水準で推移しています。令和6年は、野田湾及び大槌湾で前年を下回りました（図1-4）。

以上の結果及び水揚動向から、ヒラメの資源量水準は高位、動向は横ばいであると判断しました。

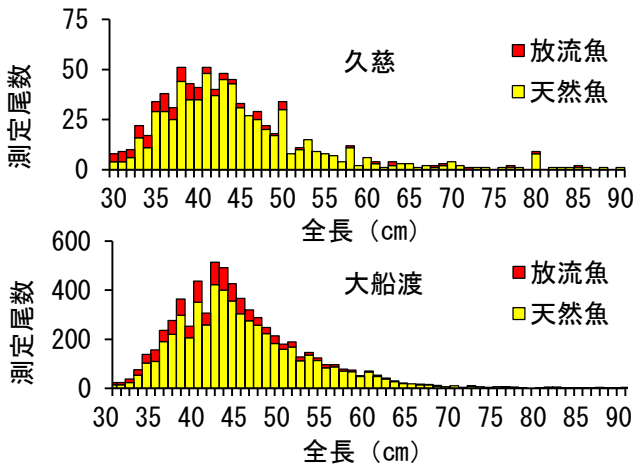


図1-2 岩手県におけるヒラメの全長組成
(久慈及び大船渡魚市場魚体測定に基づく)

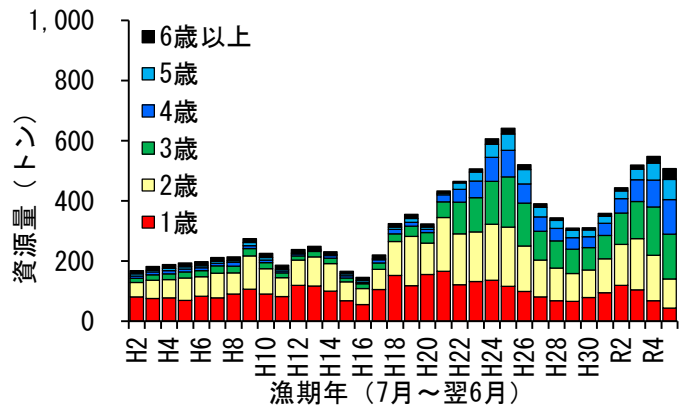


図1-3 岩手県におけるヒラメの年齢別推定資源量
(天然・放流込)

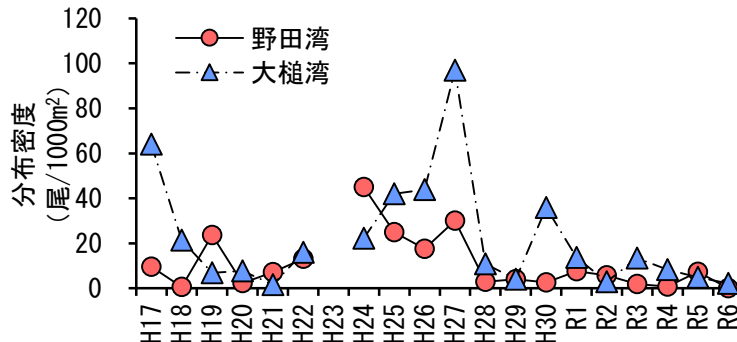


図1-4 野田湾及び大槌湾における着底稚魚分布密度

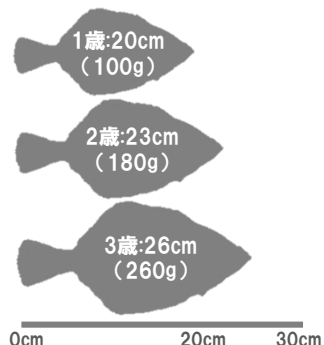
資源管理に関するコメント

ヒラメの資源量は震災以降高齢魚を主体として高い水準で推移しておりますが、近年は若齢魚が減少傾向です。

安定的な漁獲を維持するためには、現行の資源保護措置を継続し、小型魚を確実に保護することが重要と考えられます。

1-2 マコガレイ

(呼び名：まがれい・くろがしら)



1) 一般的な生態

マコガレイは北海道南部以南に広く分布する温帯性のカレイで、沿岸の砂泥底に生息し、小型のゴカイ類や甲殻類を主な餌としています。岩手県周辺では主に水深100m以浅の湾内に生息し、1～4月頃に水に沈む卵を海底に産みます。外見がマガレイと似ていますが、マガレイは一般的に無眼側の尾鰭から体側にかけて黄色がかっている一方、マコガレイには黄色い部分がありません。

成長は早く、1歳で全長20cm (100g)、2歳で全長23cm (180g)、3歳で全長26cm (260g) に達します。メスの方が大きくなり、全長35cmを超えるものはほとんどメスです。2～3歳で成熟し、産卵に加わるようになります。

2) 水揚動向

マコガレイは、主に底刺網により漁獲されています。岩手県では、資源管理計画に基づき全長20cm未満のマコガレイの再放流が行われており、漁獲対象は20cm (1歳) 以上となっています。

水揚量は、震災の影響により平成23年に大幅に減少しましたが、平成24年には震災前と概ね同水準まで回復しました。その後は70トン前後で比較的安定して推移していましたが、令和2年から減少傾向にあります。令和6年の水揚量は25トン（前年比49%、過去平均比50%）と前年を大幅に下回り、平成10年以降最も低い水準となりました（図2-1）。

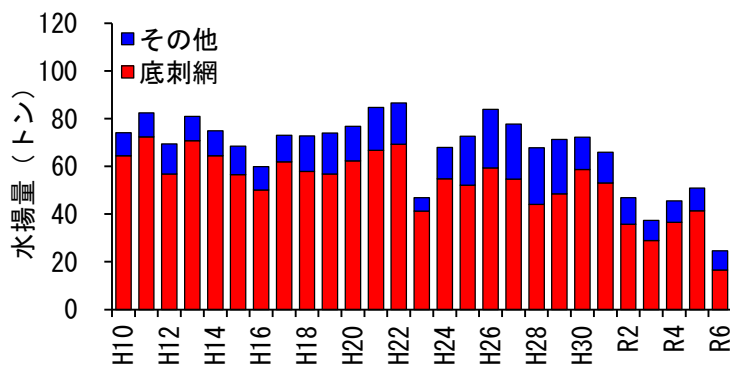


図2-1 岩手県におけるマコガレイ(水揚量の一部にマガレイを含む)の漁法別水揚量

3) 資源動向

魚市場水揚物の全長組成と水揚量に基づく推定資源量（図2-2）は、6～7年程度の周期で増減を繰り返す傾向が認められており、平成24～26年にかけて増加した後、平成27年以降は減少傾向にあり、現在も回復する傾向が認められません。令和5年（漁期:令和5年1月～令和5年12月）は、前年を下回り、過去最低の水準で推移しています。

底刺網における1隻1日あたりの平均水揚量は平成17年頃から増加傾向にあり、震災以降高い水準で推移しています。令和5年は前年を上回りました（図2-3）。

今後の加入の指標となる大槌湾における着底稚魚分布密度は、平成25年及び平成29年に高い水準が見られたものの、平成30年以降は低水準で推移しています。令和5年は、前年を上回り、平成30年以降で最も高い水準となりました（図2-4）。

以上の結果及び水揚動向から、マコガレイの資源量水準は低位、動向は横ばい傾向にあると判断しました。

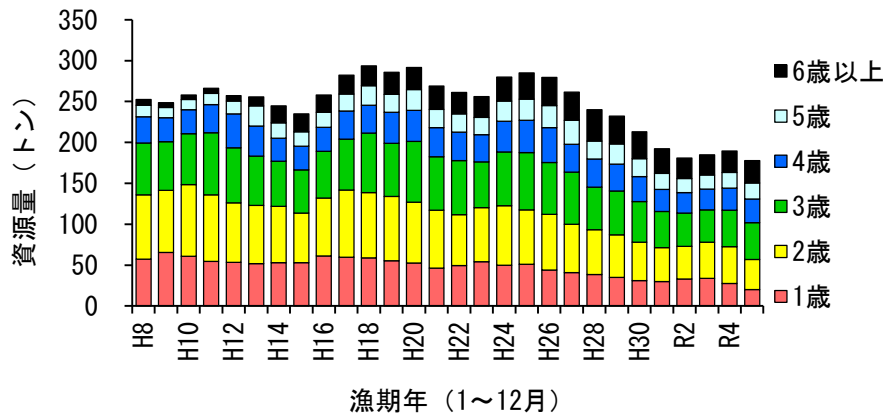


図2-2 岩手県におけるマコガレイの年齢別推定資源量

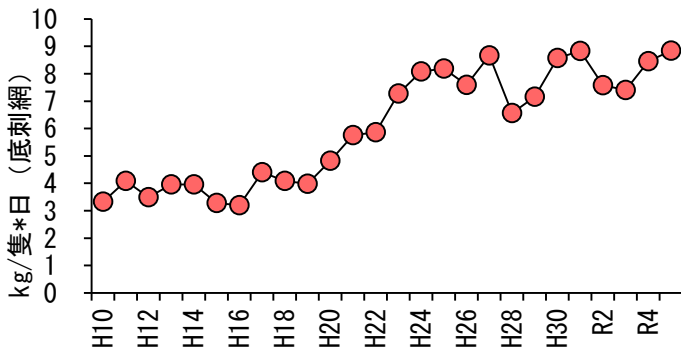


図2-3 底刺網における1隻1日あたりの平均水揚量

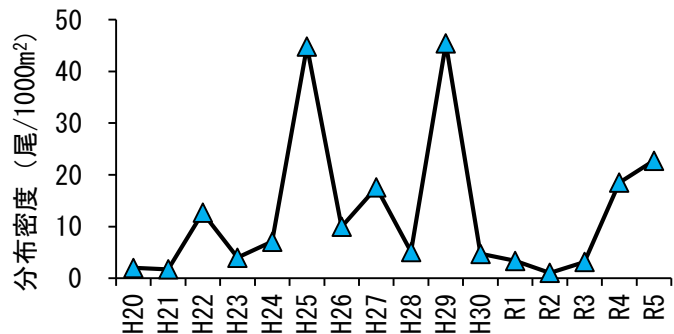


図2-4 大槌湾における着底稚魚分布密度

資源管理に関するコメント

マコガレイの水揚量は急激に減少しており、資源構成は若齢魚の減少により、高齢魚に偏重していると推定されます。今後、高齢魚の残存資源の減少に伴う資源全体の減少が継続する可能性が高いです。

安定的な漁獲を維持し、資源を回復させるためには、**現行の資源保護措置より強固な資源管理の取組**を実施する必要があると考えられます。

1-3 ババガレイ

(呼び名：なめたがれい)



0cm 20cm 30cm

1) 一般的な生態

ババガレイは、北海道から東北地方に広く分布しています。砂泥底に生息し、小型の甲殻類やゴカイ類、クモヒトデなどを餌としています。岩手県沖にみられるババガレイはごく沿岸の岩礁域から水深300m付近まで幅広く生息していますが、水深50～200m付近が分布の中心となっています。産卵時期は1～4月で、水深100m付近で水中を漂う卵を産みます。

成長は遅く、2歳で全長22cm (122g)、3歳で全長27cm (253g)、4歳で全長32cm (407g)、5歳で全長36cmに達し、4歳で成熟サイズとなって産卵に参加します。

2) 水揚動向

ババガレイは、主に底刺網、底びき網により漁獲されています。漁獲対象は概ね2歳以上で、3～4歳が主体となっています。

水揚量は、震災の影響により平成23年に大幅に減少しましたが、平成24～27年にかけて増加しました。平成26年以降、200トンを超える高い水準を維持していましたが、長期的には減少傾向です。令和6年の水揚量は106トン（前年比67%、過去平均比64%）と前年を大きく下回りました（図3-1）。

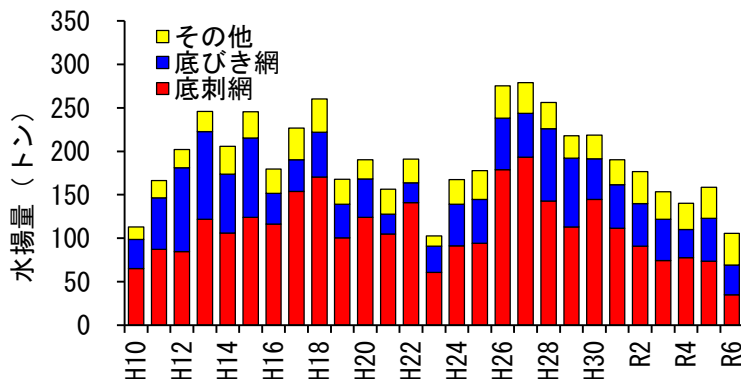


図3-1 岩手県におけるババガレイの漁法別水揚量

3) 資源動向

底刺網、底びき網における1隻1日あたりの平均水揚量は、いずれも平成24年頃から増加傾向にありましたが、平成28年頃から減少に転じ、令和5年は底刺網でほぼ横ばい、底びき網で増加しました(図3-2)。

漁業指導調査船「北上丸」によるカゴ調査で採集されたババガレイの10カゴあたりの平均採集尾数は平成26年を境に減少に転じましたが、その後、令和元年に最高水準となりました。令和5年は、前年を上回りました(図3-3)。

以上の結果及び水揚動向から、ババガレイの資源量水準は中位、動向は横ばい傾向にあると判断しました。

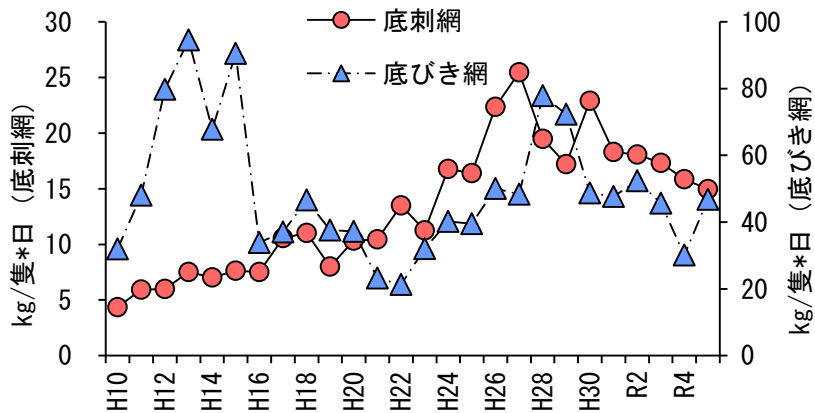


図3-2 底びき網及び底刺網における1隻1日あたりの平均水揚量

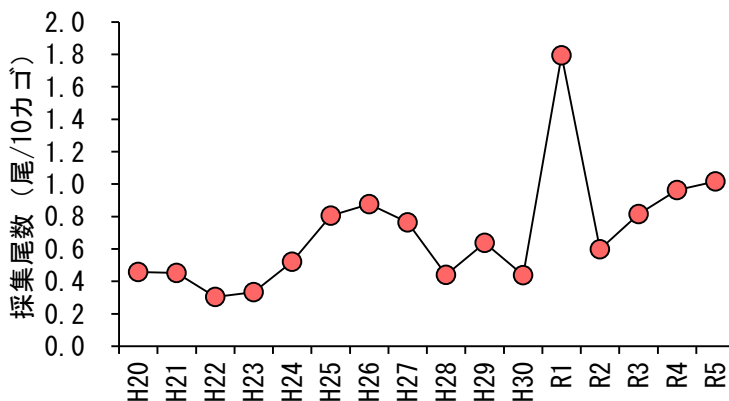


図3-3 釜石沖における調査船調査によるババガレイの平均採集尾数

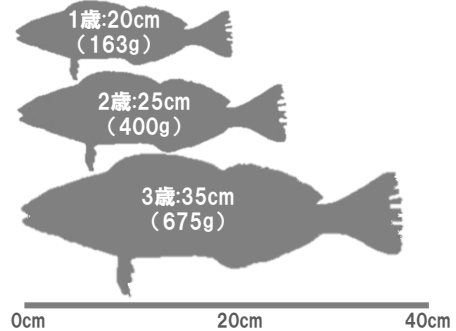
資源管理に関するコメント

ババガレイの資源量水準は、中位を維持していると推測されますが、水揚量が平成28年以降減少しており、資源量は減少に転じている可能性も考えられます。本種は成長が遅く、資源量が減少した場合、回復に時間を要することから資源量を減少させないことが重要です。

商品価値の低い小型魚と夏場の水揚げを控える等の資源管理の取組を検討する必要があります。

1-4 アイナメ

(呼び名：あぶらめ・ねう)



1) 一般的な生態

アイナメは、九州以北の岩礁域に広く分布し、ゴカイ類や甲殻類、魚類を主な餌としています。岩手県周辺にみられるアイナメは、ごく沿岸から水深200m付近まで広く生息しています。産卵期は11～12月で、ごく沿岸の浅い海底で雌雄がペアを作って粘着性の卵を海底に産み付け、オスがこれを孵化まで約1ヶ月間保護します。ふ化後はおおよそ2ヶ月間浮遊期を過ごした後、着底して親と同じ生活に移ります。

成長が速く、1歳で全長20cm (163g)、2歳で全長25cm (400g)、3歳で全長35cm (675g) に達します。2歳で成熟し、産卵に加わるようになります。

2) 水揚動向

アイナメは、主に延縄、底刺網で漁獲されています。岩手県では、資源管理計画に基づき全長25cm未満のアイナメの再放流が行われており、漁獲対象は25cm (2歳) 以上となっています。

水揚量は、震災の影響により平成23年に大幅に減少し、平成25～令和元年にかけて90～100トン前後で比較的安定していましたが、令和2年以降は50～60トン前後で推移しています。令和6年の水揚量は58トン（前年比106%、過去平均比89%）となり、前年とほぼ同程度となりました（図4-1）。

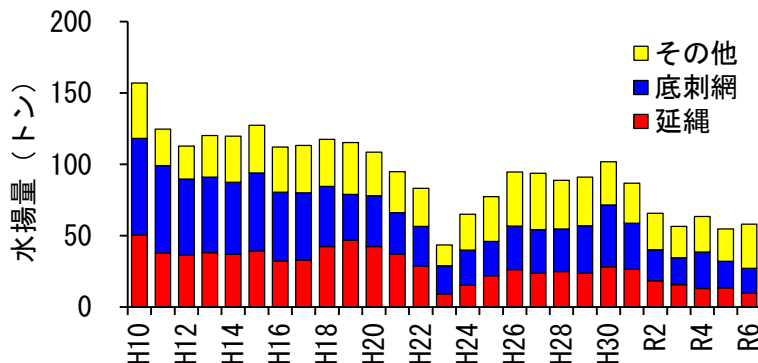


図4-1 岩手県におけるアイナメの漁法別水揚量

3) 資源動向

魚市場水揚物の全長組成と水揚量に基づく推定資源量（図4-2）は、約10年周期で変動が見られ、資源構成は平成16年以降高齢魚に大きく偏り、若齢魚の割合が低下傾向にあります。令和5年（漁期：令和5年1月～令和5年12月）は、ほぼ全ての年齢で前年を下回り、低い水準となっています。

延縄、底刺網における1隻1日あたりの平均水揚量は、震災以降比較的高い水準を維持していましたが、令和5年は、延縄はほぼ横ばい、底刺網は前年を下回りました（図4-3）。

以上の結果及び水揚動向から、アイナメの資源量水準は低位、動向は減少傾向にあると判断しました。

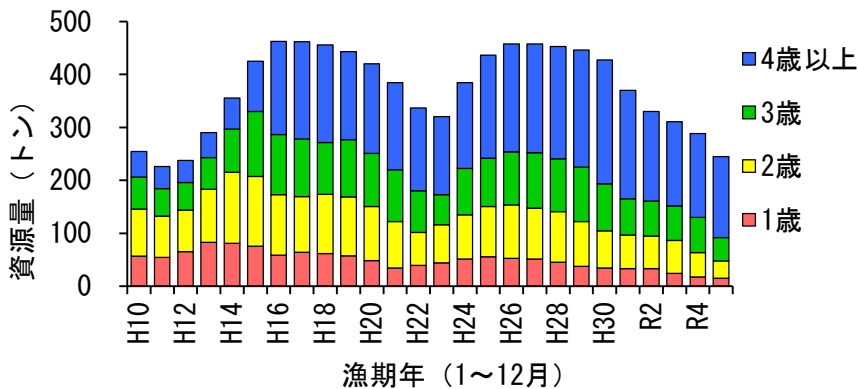


図4-2 岩手県におけるアイナメの年齢別資源量

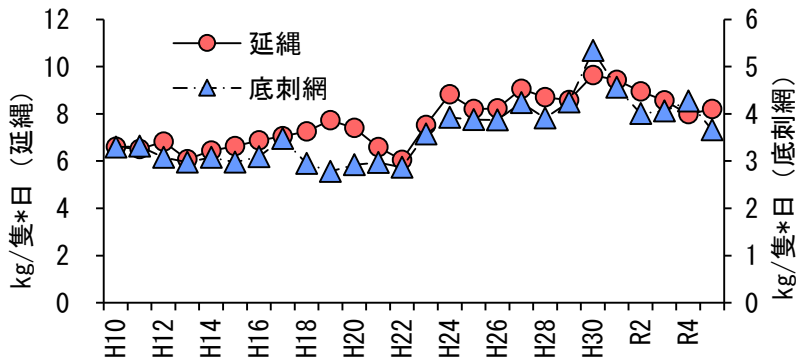


図4-3 延縄及び底刺網における1隻1日あたりの平均水揚量

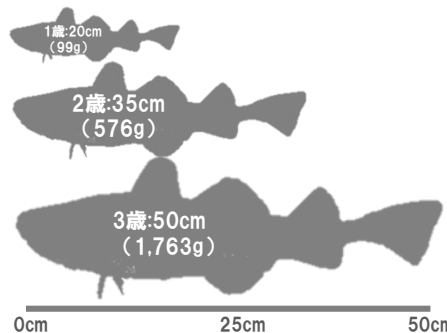
資源管理に関するコメント

延縄、底刺網の水揚隻数は、震災の影響で大きく減少し、その後も低い水準で推移していることから、現状の漁獲圧は震災以前に比べ低くなっていると考えられますが、近年、資源量は低位が続いていることから、今後の資源動向には特に留意する必要があります。

安定的な漁獲を維持し、資源を回復させるためには、現行の資源保護措置より強固な資源管理の取組の実施が必要と考えられます。また、アイナメはオスが卵を保護する習性を持つことから、産卵期からふ化時期の秋～冬季にオスの漁獲をできるだけ控える等の措置も必要です。

1-5 マダラ

(呼び名：たら・またら)



1) 一般的な生態

マダラは、常磐以北の太平洋、新潟県以北の日本海、オホーツク海に分布しています。海底付近で生活し、生後約2年間はツノナシオキアミ（いさだ）、それ以降はイカ類や魚類を主な餌としています。岩手県周辺のマダラは、通常水温4～5℃の水深200～500m付近に生息し、1～2月頃になると水深100mよりも浅い海域に回遊して産卵します。産卵は、砂泥底で行われ、たくさんの沈む卵を海底にばらまくように産み付けます。

成長は早く、1歳で体長20cm（99g）、2歳で体長35cm（576g）、3歳で体長50cm（1,763g）、4歳で体長60cm（5,066g）に達し、3～4歳で産卵に加わるようになります。

2) 水揚動向

マダラは、主に延縄（たら縄）、底びき網で漁獲されています。漁獲対象は概ね2歳以上で、産卵期になると体重2kgを上回る3歳以上の大型魚が主体となります。

水揚量は平成21年以降増加傾向にありましたが、平成25年をピークとして、平成26年以降は長期的に減少傾向が続いています。令和6年の水揚量は1,556トン（前年比61%、過去平均比63%）と前年を下回りました（図5-1）。

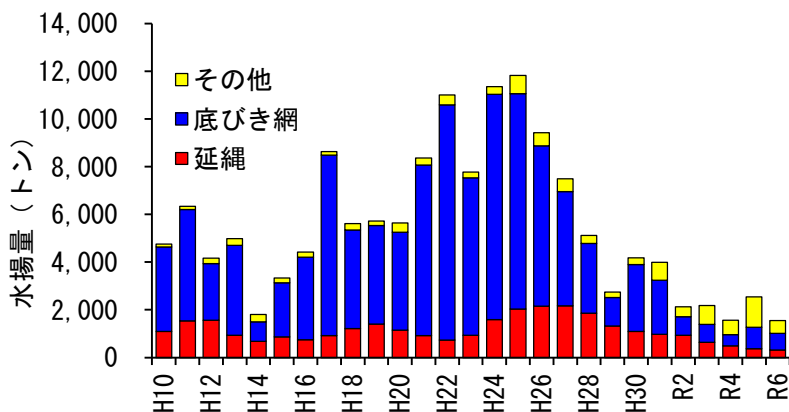


図5-1 岩手県におけるマダラの漁法別水揚量

3) 資源動向

延縄、底びき網における1隻1日あたりの平均水揚量は、平成22～25年にかけて急増した後、平成26年以降減少傾向にあります(図5-2)。延縄では、平成10年～20年頃と比べて比較的高い水準を維持していますが、底びき網では平成28年以降、震災前の平均的水準より低い状態が続いています。令和5年は、両漁法でほぼ横ばいでした。

漁業指導調査船「岩手丸」による着底トロール調査に基づく年齢別推定現存尾数は、令和5年度は春季及び秋季で、1歳魚が前年を下回りましたが、2歳魚が前年を上回りました(図5-3)。

以上の結果及び水揚動向から、マダラの資源量水準は低位、動向は横ばいにあると判断しました。

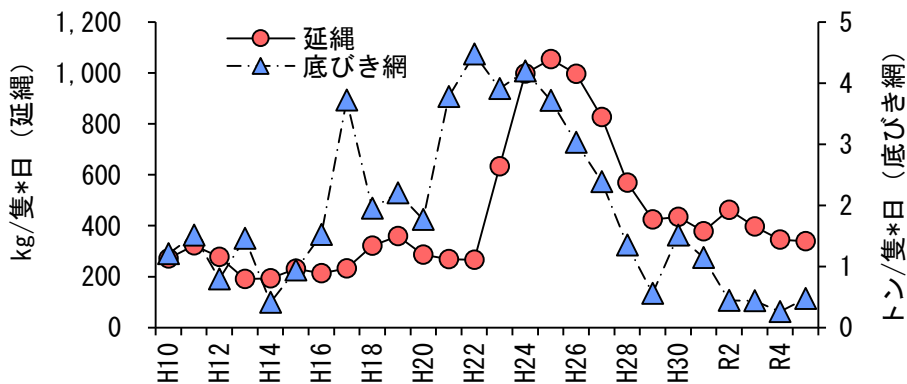


図5-2 延縄及び底刺網における1隻1日あたりの平均水揚量

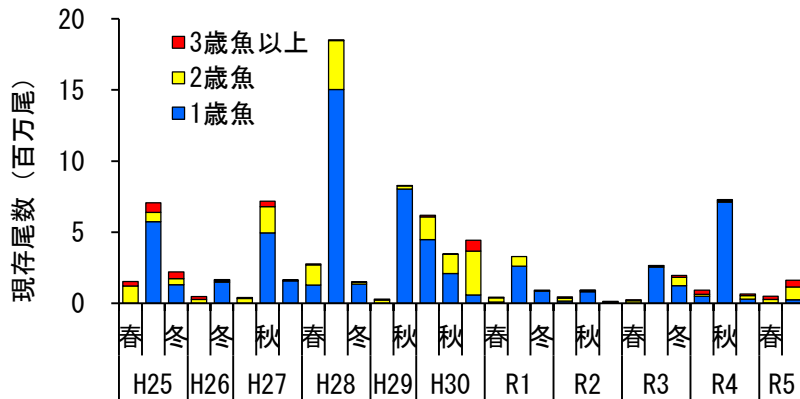


図5-3 着底トロール調査に基づく調査時期別現存尾数 (採集効率=0.2を仮定)

資源管理に関するコメント

マダラの資源量は震災以降高い水準で推移してきたものの、漁獲を支えてきた大型・高齢魚の残存資源は少なくなっているものと推測されます。なお、令和3～4年(2021～2022年)度生まれの現3・4歳魚が多く見られていることから、これらの中小型魚を親として上手く残り残すことで資源の回復が見込まれますが、獲りすぎた場合は資源の回復が大幅に遅れると考えられます。

安定的な漁獲を維持するためには、今後の漁獲加入が期待される中小型魚の漁獲をできる限り控えることが最も重要だと考えられます。

1-6 ミズダコ

(呼び名：いしだこ(宮古地区))



1) 一般的な生態

ミズダコは、常磐以北の太平洋、日本海北部、オホーツク海に分布する世界最大のタコで、エビやカニなどの甲殻類や貝類を主な餌としています。岩手県周辺でみられるミズダコは、水深300mよりも浅い海底に生息しています。産卵期は春先で、岩場に房状の卵塊を生み付け、産卵後は雌がふ化までおよそ半年間卵を保護します。

成長は、ふ化後1年で50g程度と、初期の成長が遅いものの、その後早まると考えられています。標識放流や飼育実験の結果によると、体重2kg未満の小型タコは、早いもので1～2年、一部は3年以上かけて10kg以上に達して成熟します。

2) 水揚動向

ミズダコは、主にかごで漁獲されています。岩手県では、ケガニ・ミズダコ資源回復計画に基づき、体重2kg未満の小型個体の再放流が行われており、漁獲主体は体重2～5kg程度(1歳以上)となっています。

水揚量は、震災以降変動を伴いつつも比較的高い水準を維持してきましたが、平成28年をピークとして減少に転じ、令和3年以降減少傾向が続いています。令和6年の水揚量は253トン(前年比69%、過去平均比39%)で、前年を大きく下回り、平成10年以降で最も低い水準となりました(図6-1)。

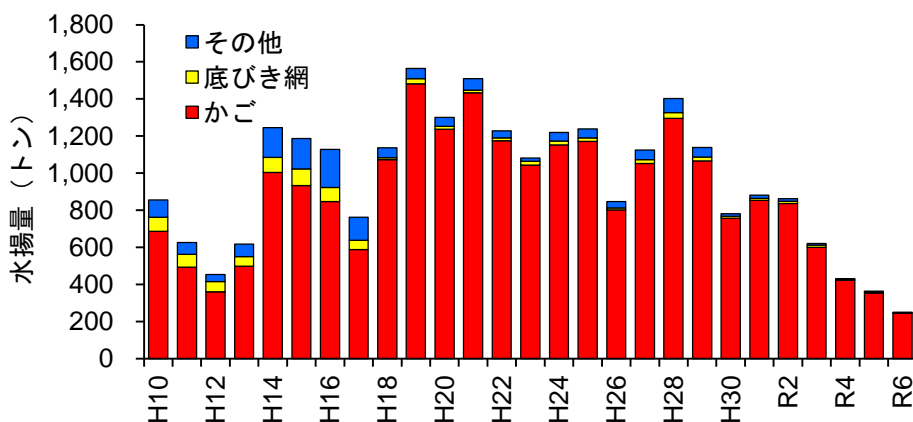


図6-1 岩手県におけるミズダコの漁法別水揚量

3) 資源動向

ミズダコの資源量は平成25年以降長期的には減少傾向にありますが、比較的安定して推移していました。しかし、令和4年に大幅に減少し、令和5年は前年とほぼ同程度となりました（図6-2）。

漁業指導調査船「北上丸」によるカゴ調査におけるミズダコの平均採集尾数は、平成24年以降減少しており、特に2kg未満の個体の減少幅が大きくなっています（図6-3）。令和5年は、5～10kgを除く体重階級で前年を下回りました。

以上の結果及び水揚動向から、ミズダコの資源量水準は低位、動向は減少傾向にあると判断しました。

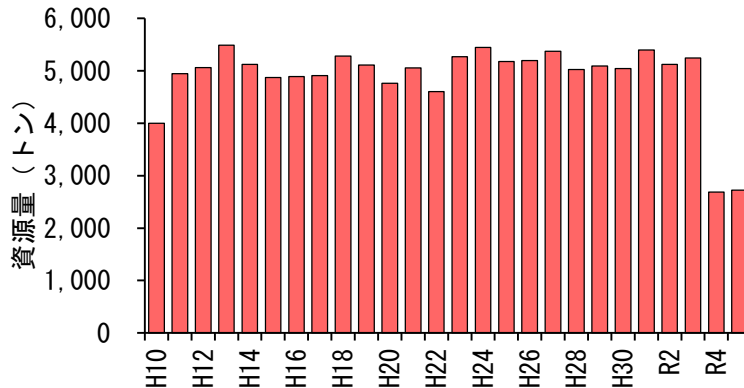


図6-2 岩手県におけるミズダコの資源重量
シェファアの生産モデル(非平衡観測誤差モデル)による推定値。
なお、近年推定精度が悪化していると予想される。

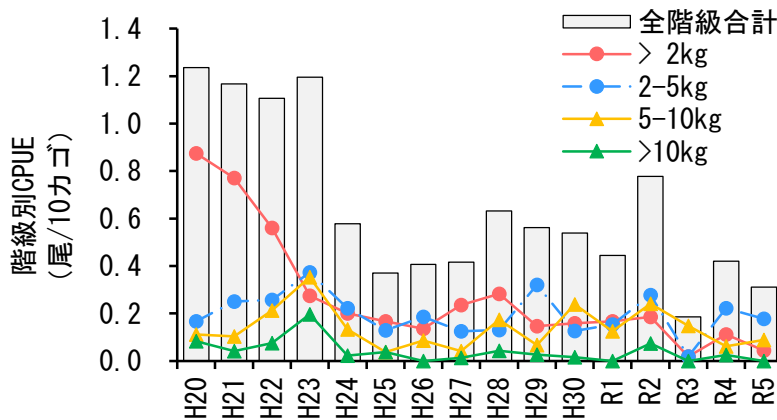


図6-3 調査船調査におけるミズダコの体重階級別平均採集尾数
4月～翌3月までのケガニ漁期前調査以外のミズダコ採捕尾数を集計。

資源管理に関するコメント

ミズダコの漁獲量は比較的安定して推移してきたものの、近年資源状態が急激に悪化している可能性が高いと推測されます。また、来漁期以降漁獲対象となることが見込まれる小型個体が少ない状況も継続しており、加入が低水準にあると推察されます。

今後、漁獲を持続的に継続するためには、産卵期（秋～冬季）に大型個体を獲り残す等のより踏み込んだ資源保護措置を検討・実施する必要があると考えられます。

1-7 ケガニ

(呼び名：けがに)



1) 一般的な生態

ケガニは、常磐以北の太平洋、日本海及びオホーツク海に分布しています。岩手県周辺では主に水深150～300mに生息しており、6～9月頃にメスが先に脱皮してオスと交尾します。産卵は交尾の約1年後に行われ、翌年春先に幼生を孵化させます。孵化した幼生はしばらく海中を浮遊した後、着底して親と同様の生活に入ります。ケガニは脱皮するごとに大きくなり、生後1年目には約6回、2年目には2回、以後毎年1回脱皮します。

成長は遅く、5歳で7.0cm (180g)、6歳で7.5cm (250g)、7歳で8.0cm (300g) に達します。メスは抱卵すると脱皮を行わないため、オスよりも成長が遅れます。雌雄ともに甲長5cm程度(2歳以降)から産卵に加わるようになります。

2) 水揚動向

ケガニは、かごと底刺網で漁獲されています。岩手県では、採捕期間(12～3月)と漁獲可能サイズ(甲長8cmを超えるオスのみ)が制限されており、漁獲対象は甲長8～9cm台(7歳以上)以上が主体となっています。

水揚量は、平成18年からかごを主体として急増し、平成23年には114トンに達しました。平成24年以降減少しましたが、平成28年から増加に転じています。令和5年(集計期間：令和5年12月～令和6年4月)は73トン(前年比127%、過去平均比188%)と前年を上回りました(図7-1)。

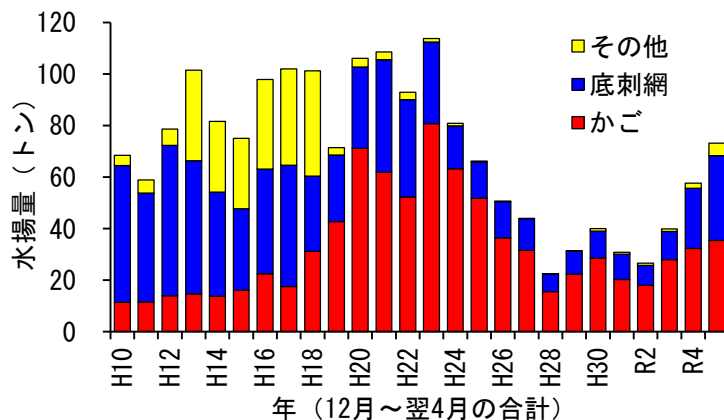


図7-1 岩手県におけるケガニの漁法別水揚量
特別採捕による4月の水揚量も含む。

3) 資源動向

漁業指導調査船「北上丸」による漁期前調査（10～11月実施）におけるオスの甲長階級別平均採集尾数は、平成20年から22年にかけて一時的に増加したものの、平成24年以降低い水準で推移しています（図7-2）。令和6年は、採捕尾数が前年を上回ったものの、甲長80mm台の甲長階級別採集尾数で前年を下回りました。

かご、底刺網における1隻1日あたりの平均水揚量は、いずれも平成24年以降減少傾向でしたが、令和2年頃から増加傾向に転じ、令和5年漁期は、かご・底刺網の両漁法で前年を大きく上回りました（図7-3）。

以上の結果及び水揚動向から、ケガニの資源量水準は高位、動向は増加傾向にあると判断しました。

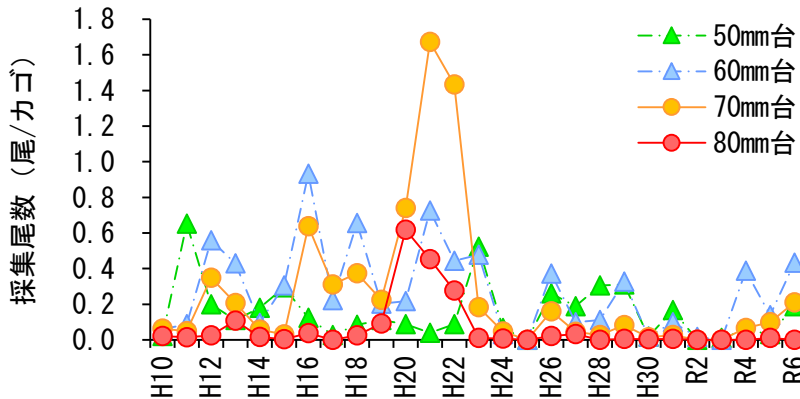


図7-2 漁期前調査で採集されたオスの甲長階級別採集尾数

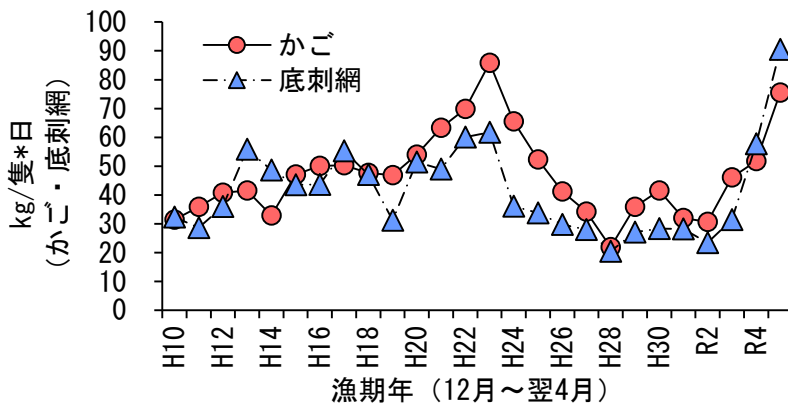


図7-3 かご及び底刺網における1隻1日あたりの平均水揚量

資源管理に関するコメント

ケガニの水揚量は近年、大きく回復しており、令和3年頃から水揚げされるケガニの大型化傾向が見られることから、今年は資源水準を高位と判断しました。これは平成30年から実施している甲長制限の効果によるものと考えられます。ただし、調査船調査においては大型・高齢個体の採捕尾数が少ないことや、漁期の遅れが見られることから、引き続き資源の動向を注視する必要があります。

資源の早期回復を図るためには、現行の甲長8cm以下の再放流等を含む資源保護措置を継続し、小型個体を確実に保護することが重要と考えられます。

1-8 チゴダラ（旧エゾイソアイナメ）

（呼び名：どんこ）



1歳:5cm

2歳:15~20cm

3歳:20~30cm

0cm 20cm 40cm

1) 一般的な生態

※チゴダラ（旧エゾイソアイナメ、地方名：どんこ）は、北海道南部から鹿児島県、台湾周辺の太平洋沿岸に分布しています。魚類を好んで捕食しますが、その他にも頭足類（イカ、タコ）、甲殻類（エビ、オキアミ）、多毛類（ゴカイ）など幅広い生物を餌にしています。岩手県周辺では、水深200~300m付近の砂泥質の海底に主に分布しています。産卵期は冬~春と考えられており、産卵のために伊豆諸島周辺まで回遊すると言われています。

成長は比較的遅く、1歳で体長で5cm、2歳で体長15~20cm、3歳で体長20~30cm程度になります。オス・メスともに3歳程度で成熟し、産卵に加わるようになります。

※国の資源評価で種名が「チゴダラ」へ変更されたため、本県でも昨年度から表記を変更しました。

2) 水揚動向

チゴダラは、主にかごや延縄により漁獲されています。漁獲対象は概ね2歳以上で、3~4歳が主体となっていると考えられます。

水揚量は、平成15年にピークを迎え、その後長期的に減少傾向となっています。平成26~28年にかけて増加しましたが、平成29年以降再び減少に転じ、令和6年の水揚量は115トン（前年比84%、過去平均比93%）と前年を下回りました（図8-1）。

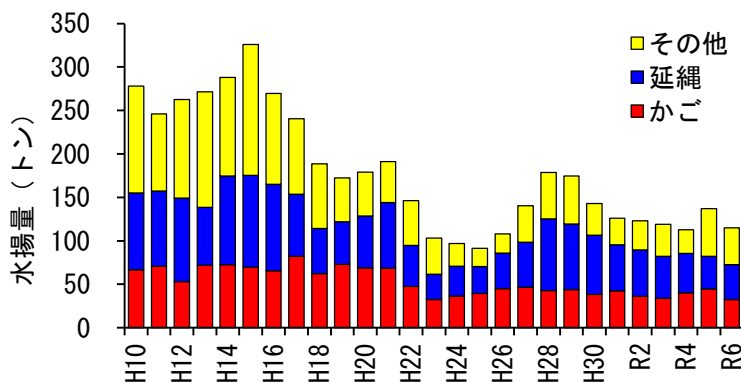


図8-1 岩手県におけるチゴダラの漁法別水揚量

3) 資源動向

漁業指導調査船「北上丸」によるかご調査で採集されたチゴダラの平均採集尾数は平成22年を最大にその後は減少に転じました。令和元年から再び上昇傾向となりましたが、令和5年は、前年を下回りました(図8-2)。一方、同「北上丸」による底延縄調査の平均採集尾数は、平成25年を最大に減少に転じ、その後はかご調査とほぼ同様の変動を示していましたが、令和3年以降は減少傾向を示しており、令和5年は前年を下回りました。

かご、延縄における1隻1日あたりの平均水揚量は、平成17年頃を最大にその後減少し、平成24年頃から横ばい傾向にあります。令和5年は、かごはわずかに増加、延縄は前年とほぼ同水準となりました(図8-3)。

以上の結果及び水揚動向から、チゴダラの資源量水準は低位、動向は増加傾向にあると判断しました。

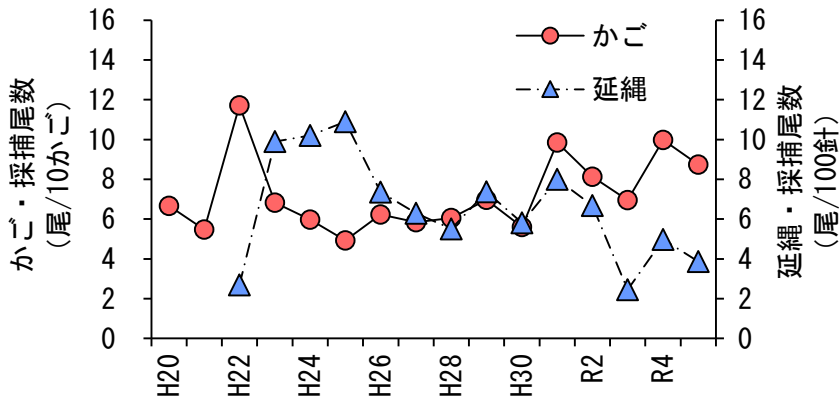


図8-2 釜石沖における調査船調査によるチゴダラの平均採集尾数

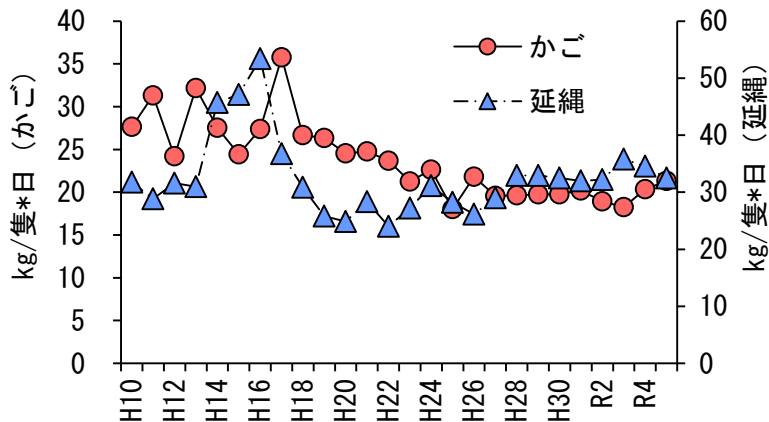


図8-3 かご及び延縄における1隻1日あたりの平均水揚量

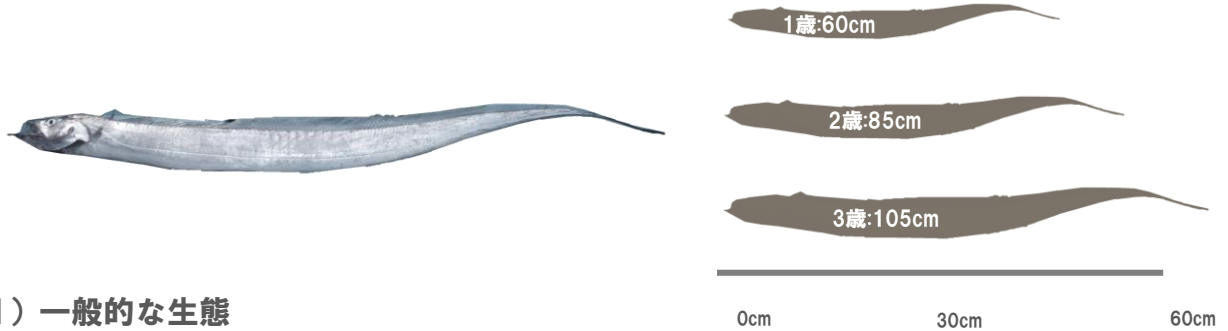
資源管理に関するコメント

現在のチゴダラの資源量水準は、低位～中位の境界付近であると推測され、近年、漁獲個体の小型化が懸念されています。本種は比較的成長が遅く、資源量の回復に時間を要することから資源量を減少させないことが重要です。

商品価値の低い小型魚と夏場の水揚げを控えることが、資源量の維持と漁獲金額の増加につながると考えられます。

2 漁獲動向把握魚種

2-9 タチウオ (呼び名：たちうお)



1) 一般的な生態

タチウオは、北海道以南の主に水深100m以深の中底層に生息し、小型個体は動物プランクトンを餌とし、成長とともに魚類を餌としてより好むようになってきています(柳川 2022)。

成長は早く、1歳で全長約60cm、2歳で約85cm、3歳で約105cmに達し、概ね2～3歳で成熟して、産卵に加わるようになってきています(宗清 1991)。

2) 水揚動向

タチウオは、主に定置網で漁獲されており、漁獲物の体長から概ね2～3歳が中心と考えられます。

水揚量は平成10年以降、平成11年を除いてわずかでしたが、令和元年から令和4年の22トンまでピークに増加しており、令和6年の水揚量は8トン(前年比194%、過去平均比100%)と前年を上回りました(図9)。

なお、タチウオは水揚量の情報が不足しているため水準評価は保留とし、動向は横ばいであると判断しました。

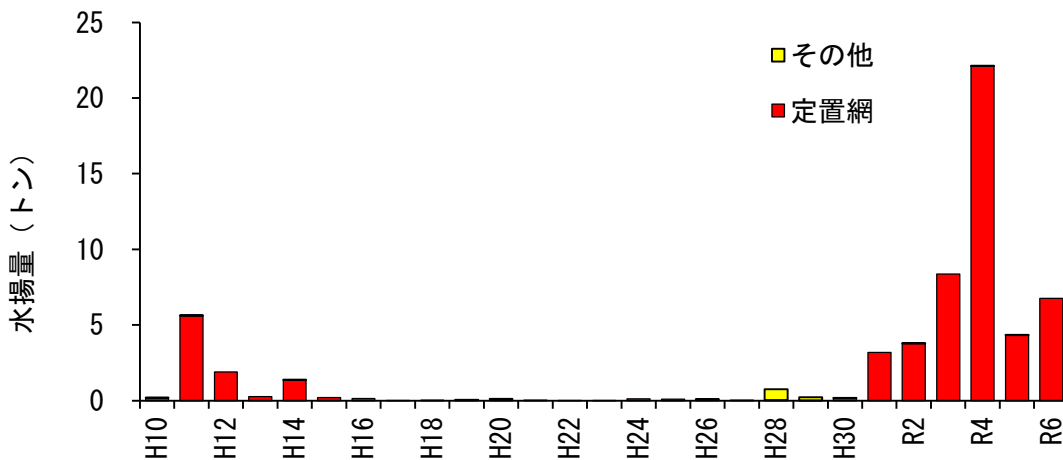
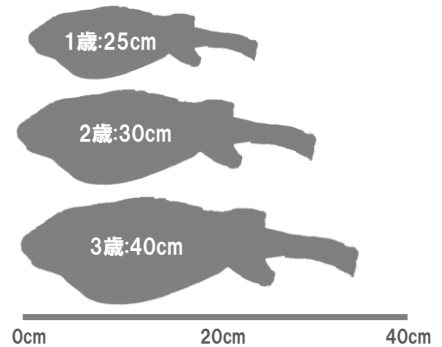


図9 岩手県におけるタチウオの水揚量

2-10 トラフグ

(呼び名：とらふぐ)



1) 一般的な生態

トラフグは、北海道室蘭以南の太平洋、日本海、朝鮮半島西岸、黄海、東海に分布し、エビ・カニ類、魚類を餌としています。産卵時期は3～5月で、水に沈む卵を水深数十メートル付近の海底に産むとされています（鈴木 2001）。

関東以西では、1歳で全長25cm、2歳で30～35cm、3歳で40～45cmに達し、オスは3歳、メスは3～4歳で成熟し、産卵に加わるようになるとされています（上田ら 2010）。ただし、海域により成長速度に差があり、東北海域の成長速度は不明な点が多い状況です。

2) 水揚動向

トラフグは主に定置網で漁獲されており、漁獲物の体長から2～3歳が主体になっていると考えられます。水揚量は、震災の影響があった平成23年に減少、平成25、26年に増加しましたが、以降は2～4トンで安定して推移しています。令和6年の水揚量は、3トン（前年比146%、過去平均比98%）と平年並みでした。（図10）。

以上のことから、トラフグの水揚量水準は中位、動向は横ばいであると判断しました。

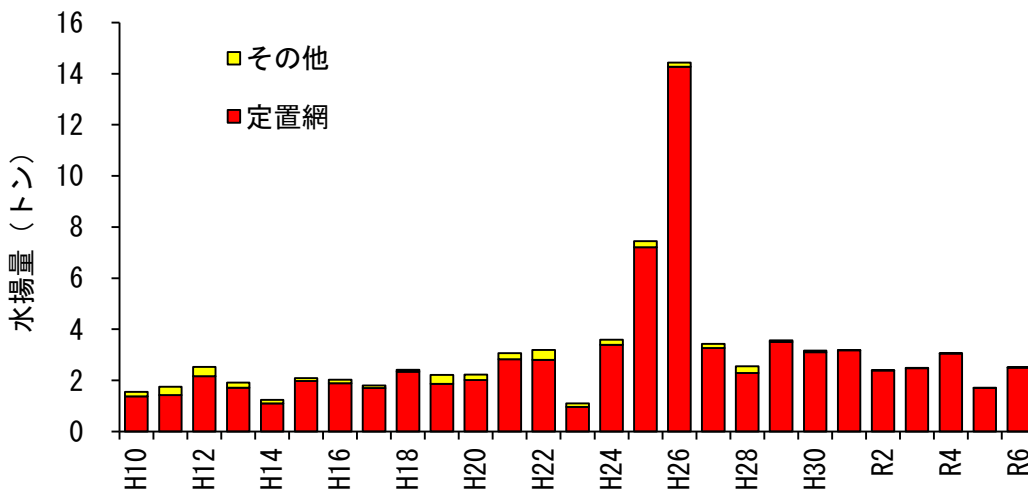


図10 岩手県におけるトラフグの水揚量

2-11 マダコ

(呼び名：いしだこ(宮古地区以外の地区))

1) 一般的な生態

マダコは、主に宮城県以南の太平洋、青森県以南の日本海北部に分布しており、津軽海峡が分布の北限とされてきましたが、近年は北海道南部でも確認されています。主にエビやカニなどの甲殻類や貝類を餌としており、東北地方ではアワビやホタテなどの貝類を捕食することが知られています。岩手県周辺では、水深100mよりも浅い海域から極沿岸の海底に生息しています。

成長は早く、概ね体重0.5~0.6kgから成熟し始め(野呂2017)、寿命は1~2年程度と考えられています(坂口2006)。



2) 水揚動向

マダコは、主にかごで漁獲され、漁獲の主体は体重数百g~3kg程度となっています。水揚量は、年により大きく変動し、平成28年までは100トン未満の年が多く、平成29年に600トンを上回った後、数百トン規模で漁獲されています。令和6年の水揚量は952トン(前年比109%、過去平均比225%)と、前年を上回りました(図11)。また、かごにおける1隻1日あたりの平均水揚量(かごCPUE)も令和元年以降、増加傾向にあります。

以上のことから、マダコの水揚量水準は高位、動向は増加傾向にあると判断しました。

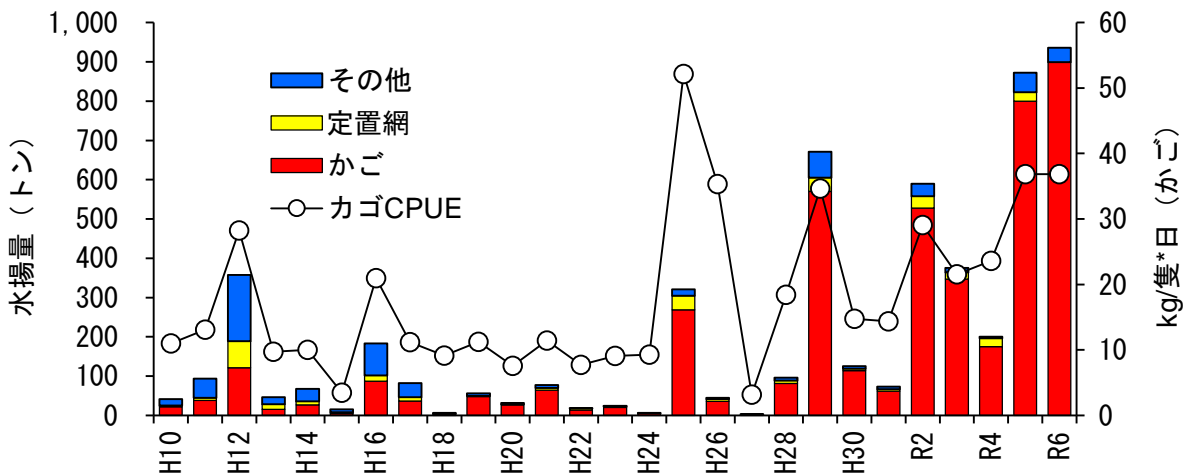


図11 岩手県におけるマダコの水揚動向

資源管理に関するコメント

現在の水揚量水準は高位ですが、漁獲努力量の急激な増加も確認されています。一方、全国的にはマダコ水揚量の減少が確認されていることから、将来的には小型サイズの漁獲制限・産卵時期の休漁措置といった資源保護の取組を検討する必要性が出てくる可能性もあります。

2-12 ツノナシオキアミ

(呼び名：いさだ)

1) 一般的な生態

ツノナシオキアミは、北太平洋に広く分布する動物プランクトンの一種です。一般的に表層～水深400mまで広く生息しており、魚類、哺乳類、鳥類などの様々な生物の重要な餌生物となっています。季節的に分布水深が変化し、春先には200m以浅に移動することから、東北海域ではこの時期の漁獲対象となっています。なお、漁場形成には親潮の南下が大きく影響すると考えられています(小達 1979)。

寿命は概ね1～2年で(瀧・荻島 1997)、体長約16～18mmで成熟し、雌のほうが大型になるとされています。



2) 水揚動向

ツノナシオキアミは、船びき網で漁獲されています。水揚量は平成12年以降減少傾向で、令和6年漁期の水揚量は2,157トン(前年比33%、過去平均比41%)と前年を大きく下回りました(図12)。

ツノナシオキアミは、漁業関係団体により年間漁獲枠が自主的に設定されていますが、平成12年以降、水揚量は継続的に減少し、漁獲枠も十分に消化されていない状況が続いています。

以上のことからツノナシオキアミの水揚量水準は低位、動向は減少傾向にあると判断しました。

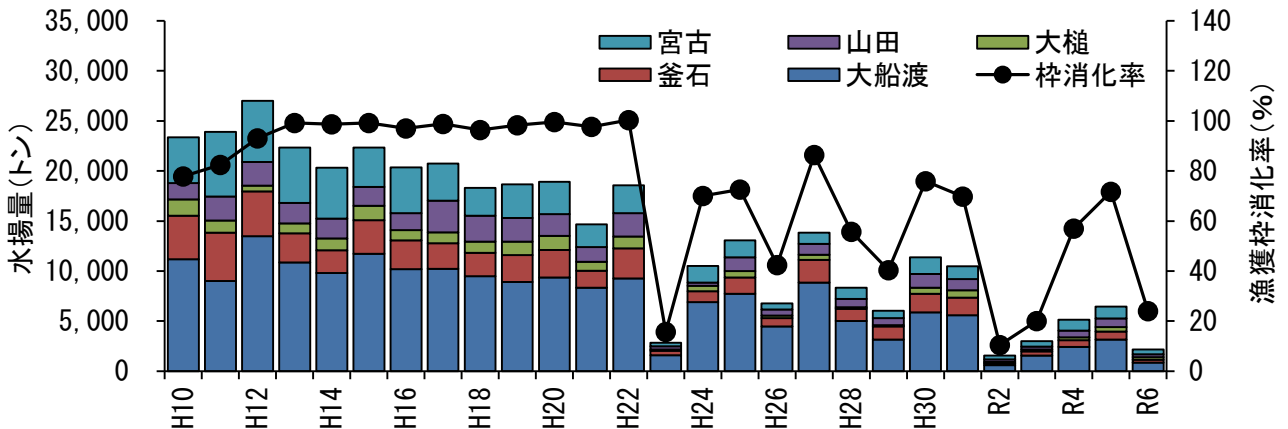


図12 岩手県におけるツノナシオキアミの地区別水揚量と漁獲桙消化率

資源管理に関するコメント

近年の水揚量水準は、低位で推移しています。ツノナシオキアミは本県に生息する魚類の重要な餌の一つですが、近年、調査している魚類の胃袋からツノナシオキアミが出現する頻度も低下しており、資源が減少している可能性があります。水揚量水準は、親潮の南下状況に大きく影響を受けるため、これまで以上に慎重に動向を注視する必要があります。

表 岩手県における主要魚種の水揚動向(トン単位)注1,2)

魚種	漁法	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R6年 震災前(H15-22) 平均比(%)	R6年 直近5カ年 平均比(%)
ヒラメ	定置網	42	31	51	81	77	76	82	95	63	99	176	171	118	88	69	52	57	70	76	81	77	127	190	175
	その他	66	34	39	57	117	62	81	72	30	48	70	85	44	52	45	40	30	30	31	47	44	44	67	122
	合計	107	65	90	137	194	138	162	167	93	146	246	257	161	141	113	93	87	101	107	128	121	171	129	157
マコガレイ	底刺網	57	50	62	58	57	62	67	69	41	55	52	59	55	44	49	59	53	36	29	37	41	17	27	42
	その他	12	10	11	15	17	14	18	17	6	13	20	25	23	24	23	13	13	11	8	9	9	8	56	79
	合計	68	60	73	73	74	77	85	87	47	68	73	84	78	68	71	72	66	47	37	46	51	25	33	50
ババガレイ	底びき網	92	35	37	51	39	44	23	23	30	48	51	59	50	83	79	47	50	49	47	33	49	34	80	75
	底刺網	124	116	154	171	100	124	105	141	61	91	94	179	193	143	113	145	112	91	74	78	73	35	27	41
	その他	30	28	36	38	29	22	29	27	12	28	33	37	35	30	26	27	29	37	32	30	36	36	122	112
	合計	245	180	227	260	168	190	156	191	103	167	178	275	279	256	218	219	190	177	154	140	159	106	52	64
アイナメ	延縄	39	32	33	42	47	42	37	29	9	15	22	26	24	25	24	28	26	18	16	13	13	10	25	55
	底刺網	55	48	47	42	32	36	29	28	20	25	24	30	30	30	33	43	32	22	19	26	19	18	45	75
	その他	33	32	33	33	36	30	29	27	14	25	31	38	40	34	34	30	28	26	22	25	23	31	98	125
	合計	127	112	113	117	115	108	95	83	44	65	77	95	94	89	91	102	87	66	56	64	55	58	53	89
マダラ	底びき網	2,267	3,463	7,565	4,133	4,127	4,108	7,149	9,868	6,599	9,442	9,017	6,727	4,786	2,925	1,205	2,796	2,264	782	758	480	890	697	13	67
	延縄	861	743	918	1,216	1,404	1,150	917	726	933	1,595	2,040	2,154	2,172	1,860	1,318	1,098	973	930	635	485	377	310	31	46
	その他	206	209	154	268	185	377	303	413	250	323	772	544	535	333	226	280	754	414	788	601	1,277	548	207	72
	合計	3,335	4,415	8,637	5,617	5,716	5,636	8,368	11,007	7,781	11,361	11,829	9,424	7,493	5,118	2,749	4,174	3,991	2,126	2,181	1,567	2,544	1,556	24	63
チゴダラ (どんこ)	カゴ	70	65	82	62	73	69	68	47	33	36	39	45	47	43	44	38	43	36	34	40	44	32	48	82
	延縄	106	99	71	52	49	60	76	47	29	35	31	41	52	82	75	68	53	53	48	45	38	40	58	85
	その他	151	105	87	74	50	50	47	52	42	26	21	22	42	53	55	37	31	34	37	27	55	42	55	115
	合計	326	270	241	189	172	179	191	146	103	97	91	108	140	179	175	143	126	123	119	113	137	115	54	93
キチジ	底びき網	138	55	51	81	84	50	133	108	109	145	124	147	232	286	266	236	139	162	169	143	150	199	227	130
	その他	25	27	21	16	12	14	11	12	2	3	6	11	14	12	21	14	14	8	9	5	4	4	20	44
	合計	163	81	72	98	96	64	144	120	111	148	130	157	246	298	287	250	153	170	178	149	154	202	193	126
ソイ類(すい)注3)	底刺網	15	14	10	15	17	26	28	24	15	16	16	15	16	15	18	24	23	15	16	22	20	16	86	82
	その他	28	29	30	32	30	42	49	47	40	53	59	47	69	77	82	58	61	54	53	49	46	40	111	76
	合計	42	42	40	47	47	68	77	71	55	70	75	62	85	92	100	82	84	69	70	71	66	56	102	77
アナゴ類(はも)	合計	95	53	58	67	94	78	80	79	45	64	102	133	127	92	86	102	91	76	57	53	69	84	111	122
ミズダコ	合計	1,734	1,634	1,121	1,178	1,606	1,336	1,547	1,260	1,102	1,243	1,263	869	1,148	1,437	1,162	794	897	875	630	437	369	253	18	39
マダコ	合計	15	183	82	6	56	32	77	18	24	6	321	45	2	96	671	125	73	590	376	200	872	952	1,620	225
ケガニ注4)	底刺網	32	41	47	29	26	31	44	38	32	17	14	14	12	7	9	10	10	8	11	23	33	-	92	264
	カゴ	16	22	18	31	43	71	62	52	81	63	52	36	32	16	22	29	20	18	28	32	35	-	90	139
	その他	27	35	37	41	3	3	3	3	1	1	0	0	0	0	0	1	1	1	1	2	5	-	26	438
	合計	75	98	102	101	71	106	108	93	114	81	66	51	44	22	31	40	31	27	40	58	73	-	78	188
タチウオ	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3	4	8	22	4	8	6,036	57
トラフグ	合計	2	2	2	2	2	2	3	3	1	4	7	14	3	3	4	3	3	2	2	3	2	3	72	60
ツノナシオキアミ注5) (イサダ)	合計	22,456	20,367	20,752	18,305	18,664	18,926	14,653	18,561	2,917	10,503	13,060	6,780	13,818	8,349	6,051	11,380	10,471	1,561	2,998	5,135	6,458	2,157	11	41

注1)岩手県水産情報配信システム「いわて大漁ナビ」集計値。

注2)水揚量は暦年集計(1~12月)。

注3)クロソイ及びその他ソイ類で集計。

注4)ケガニのみ漁期年集計(12~翌4月)であり、震災前及び直近5カ年平均比は令和5年度漁期(令和5年12月~令和6年4月)との比。

注5)ツノナシオキアミの漁期はほぼ2~4月のみ(一部5月を含む)。